



田舎暮らしの促進

捕鯨で栄えた島
観光を新たな産業に

「この島の人は知らない人にも『どこから来た?』と声をかける、そんな人懐っこさがあるんですよ。それもこの町の自慢です」と小値賀町役場総務課観光係長の橋本博明さんは誇らしげに語ります。

長崎県佐世保市からフェリーで3時間、五島列島の北端に位置する小値賀

小値賀島本島。港へ続く道には車も通れない細い道がいくつもあり、あちこちにお地藏さんが祭られている



そこで小値賀町が新たな産業として取り組んでいるのが、豊かな自然と、島人のおもてなしの心など島を丸ごと活かした体験交流型の観光です。
「本島の隣にある野崎島^のでは、廃校になった中学校を利用した『野崎島自然学塾村』を簡易宿泊施設として平成元年から運用しています。当時は観光といえば

手つかずの自然と島人のおもてなし 西の果ての小さな島が挑戦する離島の未来

長崎県北松浦郡小値賀町

町は大小17の島で構成され、そのほとんどが西海国立公園に指定されているほど自然環境に恵まれた島々です。またどこか懐かしい日本の原風景を見るようなまちなみも残っています。

島の歴史は古く、旧石器時代から人が暮らし、遣唐使の寄港地にもなっていました。明治の頃は西海捕鯨によって島は発展、五島列島の中心商業地でもありました。

現在は漁業と農業が基幹産業となっていますが、農業の担い手の高齢化や漁業を取り巻く環境が年々厳しくなっていることも影響し、町の人口は減少傾向にあります。

リゾート地が主流でしたが、野崎島で手つかずの自然をぜひ体感して欲しいと考えたのです」（橋本さん）

平成13年度には体験プログラムの提供が可能な自然学校を設立し、カヌーツーリングや島内エコツアーなどを実施するようになりました。現在では、島の魅力が口コミで広がり、県内外からの修学旅行生も含め、年間3000人近くが利用するまでになりました。

島の子どもにもなってもらおう 「民泊」事業を開始

平成18年には現在の小値賀観光を象徴する「民泊」がスタート。農家や漁家に宿泊し、その家の手伝いをしながら



廃校を活用した野崎島自然学塾村。さまざまな体験プログラムを通じて、大自然を丸ごと体感することができる

小値賀島本島から船で約25分の野崎島。村民たちが建てた旧野首(きゅうのくび)教会(明治41年建立)が今もその姿をとどめる。今年9月、ユネスコの世界遺産登録推薦が決まった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産でもある



人がいなくなった島は野生のシカたちが”住民”

ら滞在するというものです。提案したのは田舎暮らしの中で子育てをしたいという思いで移住してきた高砂樹史さん(株式会社小値賀観光まちづくり公社代表取締役)でした。
「小値賀町は平成15年の市町村合併の際、どことも合併しない自立の道を選びました。でも産業が成り立たなければやっていけない。17年に私が移住したときは、そんな模索の渦中にありました。そこで、私自身、小値賀の自然と素朴な日常に魅かれて来たことから、島の日常にこそ魅力がある、それを体

※平成13年に最後の島民が島を去り、現在は宿泊施設の管理人のみとなり事実上の無人島となっている



島の生活を体験できる「民泊」。「ぶち民家体験」として大人も体験できる

「体験してもらおうと考える民泊を提案したんです」
 お客さんをおもてなしするようなのは何も…と及び腰だった島民を二軒一軒説得し、7軒の受け入れ先からスタート。実際始めてみる側からも「楽しかった」という感想が聞かれたといいます。こうした評判は徐々に島民に広がり、現在受け入れ先は36軒にのぼっています。

「特別なことはしないんです。畑の野菜で昔から伝わる島ごはんを一緒に作るなど、その家にいる間は島の子どもになつてもらう。受け入れ先にも良い刺激になつてくれるようで、感動が双方で生まれています」(高砂さん)。今や「次の受け入れはいつ？」と心待ちにしている島民もいるほど。この取り組みは多くの評価を受け、アメリカの高校生の国際交流プログラムでは「もう一度行きたい」と満足度世界1位になったほか、数々の賞を受賞し



火山島ならではの光景がひろがる赤浜海岸

ました。

観光産業の新たな核ができたことで、ツーリズム事業としてより推進するため、平成19年にはそれまで三つあった観光団体を統合し、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会を設立。島内での体験事業や民泊、観光情報を提供する窓口となっています。

大人の島旅を提案する「古民家ステイ」

民泊事業が軌道にのり、次に検討されたのは大人向けの観光事業でした。観光産業として成り立つには通年にとり観光客を呼ぶ必要があります。そこで着目したのは町内に残る古民家。

「東洋文化研究家のアレックス・カー氏の助言を受け、古民家を改修し宿泊できるようにしました。食事を楽しめる古民家レストランもあります。癒しを求めて来島される方には、心おきなくゆっくりくつろいでもらいたい」(高砂さん)

町が所有する江戸、明治、昭和初期の古民家6棟を離島体験滞在交流促進事業などを活用して改修。1棟1組の貸し切りとなっており、家族や友達同士で、楽しく島に暮らすように過ごせます。とはいえ、島民との触れ合いも体験して欲しいというこ



「暮らすように旅する」ことができる「古民家ステイ」。家から一步外に出れば、島人のふつ々の暮らしに接することができる

とから、「ぶち民家体験」という民泊の良さを活かしたプログラムも用意しています。

古民家事業開始から丸4年、年間1500人が利用するまでになり、半分近くが東京など関東圏からの観光客。客層の広がりにも「驚きを感じています」。

「ターナー者」が増加 人口減少の歯止め

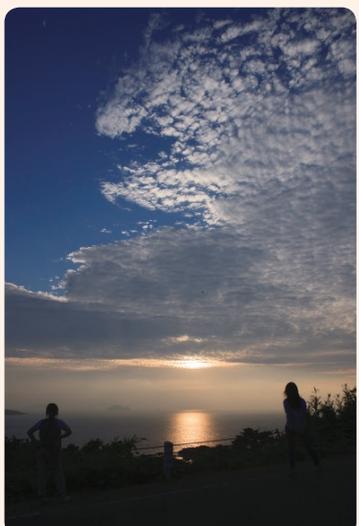
震災を境に国内の「田舎を回り積極的に体験しにく」というような旅行感の変化が感じられると両氏は話します。「施設を作って何かしよう」というこ

ではない。我々の売りはやはり「人」。小値賀にしかできないことを考えながら人を活かした交流プログラムを今後もつくっていきたい」(高砂さん)。さまざまな取り組みもあり、ターナー者の数は100人ほどにもなり、人口減少の加速を食い止めるまでになっています。

「以前野崎島自然学塾村に来た子が、学校を卒業したのでここで働きたいと言ってきてくれたんです。こうした島にきたい」という原資を増やすために、行政としても協力していきたい」(橋本さん)

漁師町の狭い路地裏を歩くと、思いがけない発見や出会いがあるのはこの島ならではの光景。また本島の西側、斑島から見る東シナ海に沈む夕陽も、まさにここでしか見られない光景です。

「行くのは不便だけど、でもまた行きたくない」と、そして「住みたくなる」——そんな島を目指して、小さな島の挑戦は続いています。



東シナ海に沈む雄大な夕陽が見られる斑島は、島屈指のサンセットスポット